

## 日本国内におけるコクチバスの mtDNA ハプロタイプの分布と侵入起原

佐藤千夏・向井貴彦（岐阜大学地域科学部）・淀 太我（三重大院生物資源）・  
佐久間 徹（福島県内水試）・中井克樹（琵琶湖博）

コクチバス (*Micropterus dolomieu*) は 1990 年代から日本国内で密放流による広がりを見せている北米原産の淡水魚であり、河川生態系への悪影響が強く危惧されている。そこで、日本国内における分布拡大パターンを明らかにするため、11 県 21 地点 210 個体のコクチバスの mtDNA 調節領域前半部の塩基配列を調査した。その結果、国内のコクチバスの遺伝的多様性は低く、ほとんどの個体 (209 個体) は高村 (2005) におけるハプロタイプ n もしくは p であった。この 2 種類のハプロタイプの頻度は東日本と西日本で大きく異なっており、関東-新潟以東では、両ハプロタイプがどの地域でも一定の割合で見られるのに対して、長野県以西では、地点ごとにどちらか一方に著しく偏っていた。このことから、東日本ではある程度以上の個体数を輸送して放流してきた可能性があり、西日本では少数の親魚の放流に由来しているものと考えられた。

また、ハプロタイプ n と p 各 1 個体について mtDNA 全塩基配列 (16,487bp) を決定したところ、両者の違いは調節領域の 1 塩基置換のみであることが判明し、遺伝的多様性が少ないことが裏付けられた。日本産ハプロタイプの塩基配列を用いて DNA データベースから得た北米産コクチバスの 31 種類の mtDNA 部分塩基配列 (調節領域, *cytb*, ND2, 16S) と比較したところ、複数の遺伝子領域が公表されている個体については、日本産と一致するものは見つからなかった。ただし、オクラホマ州の Byron State Fish Hatchery (養殖場) の個体は、調節領域の塩基配列が日本産のハプロタイプ p と一致しており、それ以外の遺伝子領域についての情報が無いために、日本産コクチバスの起原としての可能性が残された。養殖個体を日本へ輸入すれば、定着に十分な個体数を入手し易く、mtDNA の多様性も低くなると考えられることから、現在日本に分布しているコクチバスは北米の養殖場から購入して輸入されたものである可能性が考えられる。